「日韓対照大学生作文コーパス」の構想

宮城　信、伊集院　郁子、盧　姓鉉、文　智暎

キーワード：日韓対照研究、大学生作文コーパス、文章ジャンル、文章表現力、文章論的研究、言語資源

要　旨

本稿では日韓対照文章論的研究を促進させるための「日韓対照大学生作文コーパス」構築の構想を示す。本プロジェクトの眼目は、日韓対照研究に供される適切な資料の不足の解消にある。本プロジェクトで構築を目指すコーパスは順次一般公開され、研究者間での共有化を目指す。複数の文章ジャンル別に一定数を収集する等、量的質的に計画的に収集されるため、バランスの取れたものとなることが期待される。言語資源の共有化によって、結果の検証が行えない、第三者が異なる観点から分析することができない等の問題を解決することができる。さらに本稿では、日韓対照研究の課題を概観し、その展望を述べつつ、今後の研究計画について概説する。

1. はじめに—問題の所在—

著者らは、以前から日本人と韓国人が書いた文章の異同に興味を持っており、それぞれの文章を資料として、大学生の「文章表現力[1]」に関する文章論的対照研究を進めてきた[2]。日本人大学生と韓国人大学生が書いた作文では、文法的枠組みが類似していることもあり、共通点も多いが、一方で、使用語彙の偏り、好まれる文末表現の違い、意見の述べ方や論の展開の方法等異なりを見せる部分も少なくない。これまで、著者らは作文を収集して電子化を行い、計量的な側面からの分析を進めてきたが、そ

[1] 本稿での「文章表現力」とは、使用語彙や表現の多様性・適切性、文章構成力、論述する力等、多岐にわたる。また文章論的対照研究では、それぞれの観点が考察の対象となり得る。
[2] 伊集院・盧 2015、奥切・伊集院・小森 2015、清水・藤村・伊集院 2016、宮城・文 2016 等。

のような分析手法ではどうしても形式重視の分析に偏らざるを得ない。今後、文章論的対照研究の知見をさらに深化させていくためには、例えばレトリックに注目した分析、連文（関連する数文の連なり）レベルでの分析、さらには文段（文章ユニット）に着目した分析等、大きめの文法単位を表現意図に着目して考察の対象とする必要があり、それらをも踏まえた複眼的な分析の視点の導入が必須である。今後対照研究が向かう一つの方向として、文より大きな単位を対象とする研究が大きく発展していくと考えられる。そのためには両国で書かれた文章資料で質的にも量的にも真正性の高いものの整備が喫緊の課題と言えよう。

これまでの作文を用いた文章論的対照研究では、以下のような問題点が指摘されることが多い。

・分析対象となるデータが量的に不十分であること。

・分析対象となるデータの均質性が保証されていないこと。

前者は対照研究に供するにあたって量的に十分とみなし得ないという問題（例えば、あるクラスの学習者 20 人程度を対象として調査を行ったとして、それが学習者一般の能力を測ることになっているかという批判）であり、後者は文章表現力を分析する言語資源（resource）の内容的妥当性を問う問題（取り敢えず集めた作文を調査したというだけでは、はたしてそれが当該学習者の文章表現力を反映したものとなっているのかという批判）である。これらの問題点に十分に配慮した言語資源が完備され、多くの研究者で共有することができれば、少なくとも言語資源の妥当性に関する批判は回避可能で、これからの日韓の文章論的対照研究に資するところは大きいと考えられる。データを共有することのもう一つの利点は、第三者による追試が可能となる点である。多くの研究においては、分析に使用されるデータの具体的な内容（多くの場合、調査の状況のみが示されるだけである）については、第三者が参照することはできない。そのため読者や査読者からの思いがけない批判にさらされることも少なくない（例えば、結果の妥当性の検討以前に、分析の基準や手法に不備があるのではないかといった批判）。このような建設的な議論の障害に対して、本プロジェクトで構築を目指すコーパスは十分に答えるものとなっている。一義的な目的として、文章論的対照研究を意識して構築されるコーパスであるが、文レベル、語彙レベル、表記レベル等のそれぞれの分野の対照研究にも利用可能なものを目指している。

以下、2節で日韓対照研究の現状に触れた上で、3節で本コーパスの設計と基本方針

を説明し、4節で作文コーパスの展望について述べる。5節で本コーパスの活用可能性について付言する。

2. 「日韓対照大学生作文コーパス」の必要性

2.1. 日本における日韓対照研究の現状

任栄哲（2014）は、日本における韓国語研究は「依然として現代語の音韻・文法・語彙・意味に関する研究の多い中で、近年の韓日のそれぞれの国における韓国語・日本語教育の隆盛と共に対照研究も着実に増えつつある」（p.12）と述べている。中でも、尾崎編（2008）は日韓の言語行動上の異同について、相手の所有物を使う際の言葉の有無、座席選択から見た個人テリトリー意識、身体接触から見た個人テリトリー意識、空間と用具の共有、依頼行動と感謝行動、会話における話題選択の 6 つの観点から分析した研究成果をまとめたものであり、日韓の言語行動の違いが自他の領域意識の相違に起因している可能性を指摘している。分析は、東京と大阪（日本）、ソウルとプサン（韓国）で行った「日常の行動意識に関するアンケート」の結果に基づいており、同一条件下における言語行動が日本と韓国でいかに共通しているか、いかに異なるかを浮き彫りにしている点で、大変興味深いものである。

このような貴重な共同研究成果が見られる一方で、任栄哲（2014）には、日本における韓国語研究の主体は留学生であり、日本人の研究者が少ないことや韓日の研究者による共同研究が活発に行われたとは言いがたい現状も指摘されている。「日韓対照大学生作文コーパス」の構築及びコーパスを活用した日本と韓国の研究者による共同研究の実現は、このような現状を打破する方策としても意義のあるものになると思われる。

2.2. 韓国における日韓対照研究の現状

韓国における日韓対照研究は 1970 年代に始まり、1980 年代から 1990 年代にかけて成長期を向かえ、2000 年代に入って量的な発展期に差し掛かった。分野別の分布を見ると、文法や語彙に関する研究が最も多いが、2000 年代に入ってからは談話・言語行動に関する研究も増えつつある（李康民 2000ab,2002,2003,2005,2008、閔庚模 2013）。韓国における日韓対照研究の主体は、日本留学から帰国して研究や教育に携わっている韓国人研究者（元韓国人留学生）であり、近年は韓国語教育に携わっている日本人

や韓国人研究者が若干増えている。特に、2000年代からの日韓対照研究は計量的且つ実証的な研究が増えているが、コーパスを利用した研究の割合はそれ程高くなく（張元哉 2009）、いずれも個人レベルでの調査から得られたデータを考察の対象としていることが多いため、量的に不足していることや均質性・客観性が保証されていないこと等が批判の的になってきた。

このような問題を解決してより効果的に日韓対照研究を進めていくためには、量的に十分で且つ均質性の保たれている相当規模のコーパスの構築やそれを活用した日韓対照研究が必要であると思われる（閔庚模 2013、南潤珍 2012、朴海煥 2011）。「日韓対照大学生作文コーパス」の構築やそれを活用した日韓対照研究の実現は、日韓対照研究だけでなく、日本語教育や韓国語教育の分野にも有効な情報や知見を提示することができるという面で意義があると思われる。

3. 作文コーパスの設計と基本方針

3.1. 作文コーパスの特徴

日本語教育関係では、いくつかの学習者コーパスや誤用コーパス等の言語資源が既に公開され、利用可能である[3]。現時点で利用可能な学習者作文コーパスの代表的なものとして以下のようなものがある。

- 日本語学習者作文コーパス（JC コーパス）
- 日本語学習者による日本語作文と，その母語訳との対訳データベース（作文対訳 DB）
- 日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース
- 日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス

一方で、これまでの研究で収集された言語資源はどうしても日本語教育の研究・指導に利用するという目的に特化したものとなっている。これに対して、本プロジェクトの目的は日韓大学生の母語での本来の文章表現力の実態を明らかにすると共に、それを反映した言語資源を公開することによって、日韓の研究者が相互乗り入れできる

[3] 李在鎬氏の web サイト「コーパス日本語学の情報館」等を参照。
http://www.jhlee.sakura.ne.jp/index.html

共同研究環境の整備を促進することにある。

その点に配慮して本プロジェクトで収集する作文は、代表的なジャンルの文章である、explanatory text（説明文）、argumentative text（意見文）、narrative text（語り文）等を予定している。これらのジャンルの文章については多くの学生が高校までの国語科教育で作文の経験があると考えられ、大学生なりの書き分けが可能であると推測される。日韓大学生がこれらの共通の題で文章ジャンルを意識して書いた文章を収集して電子化を行う。

「日韓対照大学生作文コーパス」の概要は、以下の通りである。

・日韓の大学生が母語で書いた日本語作文・韓国語作文を収集する。

・作文は、共通の課題・テーマで書かれたものとする。

・作文は、それぞれの課題をテーマ毎に300編を目標に収集する。

・作文は、電子化し、機械解析後人手で修正を施して語彙情報を付与する。

・形態素ごとに日本語文には韓国語の逐語訳を、韓国語文には日本語の逐語訳を付ける。

最終的に両言語の作文コーパスを関連付けて基本形からの検索や日韓での同意語同時検索、逐語訳からの逆検索が行える検索システムも開発する。

3.2. 資料収集の方法と留意点

作文の収集・電子化は、年度別に分けて実施する（本年度は意見文の調査を実施する予定）。調査方法の概要は以下の通りである。

共同研究者の大学教員らに依頼して、研究協力者の日韓大学生に題毎に作文を書いてもらう。調査状況で不均質が発生しないように、条件を統一する（専用の調査用紙、調査時間、指示マニュアルを用意する）。また、研究協力者は原則として任意の公募とする。作文の質の担保と調査上の倫理的配慮から調査協力者の学生には謝金（または相当額の物品）を支払う。なおデータの公開を想定して、事前に本人に研究・教育利用に限定した公開の了解を得る（同意書を作成）。また本調査は、研究倫理に配慮して著者らの所属機関の研究倫理委員会に諮り承認を得て実施する。

3.3. 電子化の方針

作文の電子化は、以下のような指針に従って電子化、アノテーション（annotation、語彙情報の注釈）が進められる。

〈電子化の指針〉

・できるだけ、正確に紙面を再現するよう心がける。

・段落初めの一字下げや空欄（意味不明なものも含めて）も正確に記録する。

・基本的な方針として、誤字・脱字、文字種の誤りがあってもそのまま記録する。ただし、推測可能な誤りについては修正した版も作成する。

・入力後に入力者以外の者が原本と照合し、入力ミスを修正する。

・個人が特定される可能性のある個人情報に関わる部分は、当該部分を伏せ字にして記録する。

・1作文1ファイルで記録し、整理番号を付す。整理番号から、国籍、課題、年齢、性別等が判別できるようにする。

・本文電子データと対応させて、語彙情報を付与した語彙リストを作成する。

本文データと共に公開される語彙リスト（試作版）は以下のような形式である。

表１：日本語文の語彙リスト（試作版）

書字形	逐語訳	語彙素	語彙素読み	品詞
京都	교토	キョウト	キョウト	名詞-固有名詞-地名-一般
から	에서	から	カラ	助詞-格助詞
富山	도야마	トヤマ	トヤマ	名詞-固有名詞-地名-一般
に	에	に	ニ	助詞-格助詞
引っ越し	이사하	引っ越す	ヒッコス	動詞-一般
て	고	て	テ	助詞-接続助詞
まだ	아직	未だ	マダ	副詞
1	1	一	イチ	名詞-数詞
年	년	年	ネン	名詞-普通名詞-助数詞可能
半	반	半	ハン	名詞-普通名詞-一般
ほど	정도	ほど	ホド	助詞-副助詞
しか	밖에	しか	シカ	助詞-副助詞
経っ	지나	経つ	タツ	動詞-一般
て	고	て	テ	助詞-接続助詞
い	있	居る	イル	動詞-非自立可能
ない	지 않	ない	ナイ	助動詞
が	지만	が	ガ	助詞-接続助詞
、	,	、		補助記号-読点
夏	여름	夏	ナツ	名詞-普通名詞-副詞可能
の	의	の	ノ	助詞-格助詞
暑	덥	暑い	アツイ	形容詞-一般
さ	음	さ	サ	接尾辞-名詞的-一般
から	에서	から	カラ	助詞-格助詞
秋	가을	秋	アキ	名詞-普通名詞-副詞可能
を	을	を	ヲ	助詞-格助詞

本コーパスは希望者に無償で提供される（原則として研究・教育目的の利用に限る）予定で、準備ができ次第順次公開していく（本文末にあげた関連 web サイトを参照されたい）。ただし、公開は電子データのみに留め、個人情報保護に配慮して収集した作文原本は非公開とする。

4. 作文コーパスの展望

4.1. 作文コーパスの今後の展開

本プロジェクトで構築する「日韓対照大学生作文コーパス」は、複数の文章ジャンルを扱っており、ある程度の多様性を担保している。もちろん本コーパスが量的質的に日韓大学生の文章の特徴を完全に映し取ったものというわけではない。しかしなが

ら、コーパスを使った文章論的研究が多様な展開を見せる現在において、限定的な文章ジャンルであっても条件の整備された日韓対照作文データを提供する意味は少なくない。本コーパスを言語研究に供するに当たって、ある程度データが揃ったところで、試験的な例文調査やコロケーションの調査等を実施して有効性を検証していく必要がある。様々な研究課題での活用が期待できる一方で、当然ながら題や作成者の範囲を広げて作文調査を実施したいという要望が出ることが予測される。それに答えるべく長期的な展望として日韓対照に留まらないコーパスの拡充を計っていく必要がある。例えば、本コーパスと次のようなコーパスが関連づけられる可能性がある[4]。

・児童生徒の作文コーパス

・他の文章ジャンルの作文コーパス

・日本語と韓国語以外の大学生の作文コーパス

将来的にそれらのコーパスとの連携を図っていくことも視野に入れている。言語資源の収集と電子化が順当に進めば、様々な発達段階を縦断横断的に調査可能な大規模作文コーパスを整備することができることになる。その第一歩としての「日韓対照大学生作文コーパス」であることを強調しておきたい。

4.2. 作文コーパスを用いた研究の展望

4.2.1. 語レベルでの対照研究

日本語と韓国語の文法的枠組みの類似性についてはすでに指摘したことであるが、助詞体系さらに個別の助詞においても、機能や用法の類似点が多く見られる。近年、日韓両言語の機能語に着目した研究も行われるようになってきている（例えば、北村2016，韓必南2010，曹美庚2002等）。内容語研究に比べて機能語研究においては、内省が働き難く類似する文脈における差異を見いだし難いという問題点があり、直接的に意味記述を行うのではなく、複数の例文を比較して容認性の違いを検討するという手法がとられることが多い。ところが、もともと類似している語同士なので作例でクリティカルな例文を得ることは難しい。そのような場面で「日韓対照大学生作文コーパス」は、機能語の使い分けを検討する有効な選択肢の一つになると考えられる。例

[4]「児童・生徒作文コーパス」等一部のコーパスについては現在構築が進められている。本文末の関連 web サイトを参照されたい。

えば、文智暎(2006) では、一般に二重ヲ格の文に対する制約が少ないとされる韓国語のul/lul格の容認性と条件について検討している。当該論文では、アンケート調査やコーパス調査を通して、日本語に比べ単文中にもul/lul格連続がより表れやすいことは認めるものの、二重 ul/lul 格制約が韓国語にも働いていることを明らかにした。一方で、当時の限定的な資料に基づく考察である点や、韓国語における二重ul/lul格制約が今後どのように受容されていくのか等の課題があり、今後対象を拡大した経年調査が必要となる。そのために比較的規模の大きな調査を行うか、相当規模のコーパスを準備する必要がある。現在、日本では国立国語研究所が中心となって「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）等の大規模コーパスが整備されつつある。一方で、韓国においても国立国語院で提供する「21 世紀世宗計画コーパス」が公開されている。当該研究の調査時の環境より随分改善されてはいるものの、日韓両言語で同条件で作成された相当規模のコーパスは管見の限り見当たらない。既に指摘したように、日韓対照研究の言語資源としては、両言語間で対応付けがなされているものが望ましい。その点でも「日韓対照大学生作文コーパス」の構築は今後の対照研究に大きな意味を持つと考えられる。

4.2.2. 文レベルでの対照研究

「日韓対照大学生作文コーパス」は、特に表現構造における日韓対照研究にも役立つと思われる。林八龍（1995）は表現構造に関する日韓対照研究の分野で先駆的な存在である。林八龍（2004）では「日本語の場合、事態簡潔で含蓄的な名詞表現でもって静的に捉えようとする傾向が強い反面、韓国語の場合は、事態を具体的且つ説明的に動詞でもって動的に捉えようとする傾向が目立つ」（p.231）と述べ、日韓の表現構造の違いを的確に指摘している。このような研究成果は、金恩愛（2003）「日本語の名詞志向構造：韓国語の動詞志向構造」や平木（2015）「日本語の体言的表現：韓国語の用言的表現」等によって受け継がれている。この他日韓の表現構造に関する先行研究から「日本語の受動文：韓国語の能動文」、「日本語の自動詞文：韓国語の他動詞文」等が日韓両言語を特徴付ける相違点として指摘されてきた（李在恩他 2013、林八龍 2014、丁意祥他 2014 等）。だが、これらの研究は作例・ドラマシナリオ・電子化されたテキスト等から取り上げた例文を考察の対象としていることから、データの均質性が保証されていないことや量的な不足が問題点として指摘されてきた。

本プロジェクトで求めている「日韓対照大学生作文コーパス」の構築やそれを活用した日韓共同研究が実現できれば、今までの日韓の表現構造に関する先行研究が抱え

てきたデータの問題を乗り越えてその成果をさらに深化させるとともに、文レベルでの日韓対照研究の幅を広げていく上で大きく貢献できるだろう。

4.2.3. 談話レベルでの対照研究

従来のコーパス研究は、コンコーダンスソフト[5]を用いて語彙や文法を抽出し、その共起関係やふるまいを解明するような研究を得意としてきた。形態素解析が施され、品詞情報等のアノテーションが付与されたコーパスも数多い。しかし、近年は語法の分析や辞書編纂だけでなく、これまで少数データの質的研究に留まりがちであった談話分析や語用論研究にも、コーパスが利用されつつある。

例えば、佐々木（2001）は国立国語研究所による「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」から取り出した中国語母語話者による日本語作文43編を母語話者の作文と比較し、母語話者は94.2%が「（話題提示）→自分の立場表明→理由の説明→結論」という構成であったのに対し、学習者の文章にはプロトタイプ的な構成は見られなかったことを明らかにし、中国語を母語とする日本語学習者の作文教育に示唆を与えている。また、伊集院・髙橋（2012）でも、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」を用いて3者間の構造分析を行い、日本人大学生の意見文は、「はじめ」と「おわり」に主張を置く型が典型であるが、韓国・台湾の大学生による日本語意見文は、「はじめ」と「おわり」、「なか」と「おわり」、「おわり」だけに主張を置く型がそれぞれ20%以上出現しており、典型的な文章構造の型は見られなかったと述べている。このように、異なるコーパスを用いた研究で同様の特徴が見出された点は興味深く、今後このような作文データの蓄積・公開が進むことによって、対照研究が飛躍的に進むことが期待できる。

さらに、伊集院・盧（2015）では、上記のデータベースに含まれる日本人大学生による日本語意見文（JJ）と韓国人日本語学習者による日本語意見文（KJ）に加え、新たに韓国人大学生による韓国語意見文（KK）を追加収集し、同様の手法で文章構造の対照研究を行っている。その結果、KKの特徴がKJにも反映されていることが明らかとなり、母語で執筆する作文の文章構造が学習言語にも影響している可能性が示唆されている。具体的な結論としては、伊集院・髙橋（2012）の分析結果と同様の結果がKKにも表れていたこと、さらに、意見文の冒頭文は、JJでは「主張」か「背景」、KKとKJでは「背景」が多く、最終文は、JJでは「主張」が多いがKKとKJは

[5] コンコーダンスソフトの例は李在鎬氏による以下のページが詳しい。
http://jhlee.sakura.ne.jp/page3.html#id_09757330

JJ より「根拠」や「補足」で締め括られる例が多かったことが指摘されている。このように、各研究の目的に応じ、既存の公開コーパスに新たに独自データを追加することによって、学習者の作文に現れる特徴が母語での文章構造の影響を受けているか否かを論じることも可能となる。研究者個人で全データを収集、整備していくのは非常に大きな困難を要するため、「日韓対照大学生作文コーパス」の利用が可能となれば、様々な研究目的に貢献し得る、貴重な研究言語資源となるだろう。

5. おわりに

ここまで述べたように、本プロジェクトでは日本人大学生と韓国人大学生の文章表現の異同を論じることができる共有言語資源として「日韓対照大学生作文コーパス」の構築と公開を目指している。これまでの対照研究の多くは、日本語母語話者と外国人日本語学習者が書いた日本語作文を資料としている場合が多く、その異同を論じることはできても、その異同が母語に起因しているのか否かまで論じることは難しい。本コーパスで供される言語資源はこの問題に一石を投じるものである。また、日韓対照研究に興味を持っている、文章ジャンル別の文体調査をしたい、しかし適切な言語資源がないといった研究上の需要を満たすことも可能である。現実的な問題として、対象言語の微妙なニュアンスの違いを読み取れず適切な訳が難しいといった問題が自由な研究を妨げる障碍になっている場合もある。本コーパスはこのような問題解決の一助になることが期待される。また利用者が拡大すれば、異分野・多分野間の連携が強まり、様々な共同研究が促進される可能性がある（例えば、日本語教育や日韓の国語学・国語教育の研究にも刺激を与えることができそうである）。コーパスの構築と並行して、コーパスを利用した研究経験の少ない研究者の助けとなる簡便な検索システムも併せて開発する予定である。

以上、本コーパスを使った研究モデルを示し、今後の展望を述べながら本分野の研究の活性化をはかった。本コーパスは数年かけて順次拡張・整備されていく予定である。3 ジャンルの作文（典型的な文章のスタイルをもつ文章ジャンルとして、意見文、説明文、語り文を想定している）を手始めに、最終的には 50 万形態素規模のデータ量を目指している。現在の状況では、計画的に構築されたこの規模の一般利用可能なデータは見当たらない。将来的に、様々な研究利用に必要となる言語学的情報の付与も視野に入れて開発を進めていく予定である。

参考文献

伊集院郁子（2016）「学習者要因の分析②―コーパスに基づく研究―」，徐敏民・近藤安月子（編）『日語教学研究』，外語教学与研究出版社（中国･北京），pp. 385-406

伊集院郁子・髙橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴―『主張』に着目して―」，『東京外国語大学国際日本研究センター日本語・日本学研究』2，pp.1-16

伊集院郁子・盧姓鉉（2015）「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴―日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較―」，『社会言語科学』18-1，pp.147-161

李康民（2000a）「韓國에 있어서의 日本語 研究（1994～1996）―專門學術誌의 研究動向」，『漢陽日本学』8，漢陽日本學會，pp.85-109

李康民（2000b）「韓國에 있어서의 日本語 研究（1997～1998）―專門學術誌의 研究動向」，『日本学報』45，韓國日本學會，pp.147-162

李康民（2002）「韓國에 있어서의 日本語 研究（1999～2000）―專門學術誌의 研究動向」，『日本学報』52，韓國日本學會，pp.69-90

李康民（2003）「韓國에 있어서의 日本語 研究（2001～2002）」，『日本学報』55，韓國日本學會，pp.117-141

李康民（2005）「韓國에 있어서의 日本語 研究（2003～2004）―專門學術誌의 研究動向」，『日本学報』64，韓國日本學會，pp.409-430

李康民（2008）「韓國에 있어서의 日本語 研究（2005～2006）」，『日本学報』74，韓國日本學會，pp.427-450

李在恩・尹相實（2013）「한일 표현구조 차이에 관한 고찰–자동사,타동사 표현을 중심으로–」，『日本言語文化』24，韓国日本言語文化学会，pp.151-169

任栄哲（2014）「日本社会言語学との出会い、そしてその後の道程」，『社会言語科学』16-2，pp.4-17

奥切恵・伊集院郁子・小森和子（2015）「日本人英語学習者による意見文の論理展開

—言語形式とその機能に着目して—」，『日本語用論学会第17回大会論文集』，pp.243-246

尾崎喜光（編）（2008）『対人行動の日韓対照研究—言語行動の基底にあるもの』，ひつじ書房

北村唯司（2016）「助詞「-が」と「-가/이[ga/i]」の日韓対照研究」，『専修大学外国語教育論集』44，pp.89-104

金恩愛（2003）「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」，『朝鮮学報』188，朝鮮語学会，pp.1-83

佐々木泰子（2001）「課題に基づく意見の述べ方—日本人大学生の場合・日本語学習者の場合—」，『平成 11～12 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書　日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』，国立国語研究所，pp.219-230

清水由貴子・藤村知子・伊集院郁子（2016）「中級日本語学習者の意見文に見られる『しかし』の分析—『JLC1 年コース作文データベース』を用いて—」，『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』42，pp.41-56

張元哉（2009）「韓国の日本語学における韓日対照研究の現状と課題」，『韓国日本語文学会学術発表大会論文集』，韓国日本語文学会，pp.36-42

丁意祥・丁一栄（2014）「일본어 수동의 한국어 비수동 번역 양상에 관한 고찰:일본드라마 자막번역의 사례분석을 중심으로」，『비교일본학』，한양대학교 일본학국제비교연구소，pp.263-294

曹美庚（2002）「日本語の格助詞「に」と韓国語の格助詞「에」の比較研究」，『京都学園大学経営学部論集』11-3，pp.83-122

丁意祥・丁一栄（2014）「일본어 수동의 한국어 비수동 번역 양상에 관한 고찰:일본드라마 자막번역의 사례분석을 중심으로」，『비교일본학』，한양대학교 일본학국제비교연구소，pp.263-294

南潤珍（2012）「한일 대조언어학적 관점에서 본 한국어 문법학습의 과제와 코퍼스의 활용　가능성」『국어교육연구』30，서울대학교　국어교육연구소，pp.315-341

盧姓鉉（2014a）『韓日コミュニケーション行動の対照研究—貸し借り行動・意識に注目して—』，WHOIN

盧姓鉉（2014b）『不満表明とその返答に関する韓日対照研究』，BOOK&NAMU

盧姓鉉（2015）「韓國人の無言行動の意味/機能に關する社會言語學的研究―類似した状況の下で現れる日本人の言語／非言語的行動との對照―」，『日本言語文化』33，pp.107-122

韓必南（2010）「連体助詞「の」を含む名詞句の韓国語対応形について：日韓翻訳テクストの分析を通して」，『言語・地域文化研究』16, pp.331-349

平木孝典（2015）「日韓対照言語表現研究―日本語の体言的表現と韓国語の用言的表現―」，『千葉科学大学紀要』8，pp.23-37

朴海煥（2011）「한국의 일본어학연구의 방향성」，『日本語學研究』32, 한국일본어학회，pp.85-103

宮城信・今田水穂（2015）「『児童・生徒作文コーパス』の設計」，『第 7 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，国立国語研究所，pp.223-232
（https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no7_papers/JCLWorkshop_No7_web.pdf　よりダウンロード可能）

宮城信・文智暎（2016）「日韓大学生の作文に見る随筆の対照分析―文末表現と文の展開の連関―」，韓国日語教育学会学術大会発表資料

文智暎（2006）「韓国語の ul/lul 格連続現象について―日本語のヲ格連続現象との対照―」，『日本語と日本文学』43，筑波大学日本語日本文学会，pp.14-27

閔庚模（2013）「한일 대조연구의 동향 분석과 과제―국내의 연구 동향을 중심으로―」，『언어와 문화』9-2 한국언어문화교육학회，pp.145-172

林八龍（1995）「日本語と韓国語における表現構造の対照考察―日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として―」，『宮治裕・敦子先生古希記念論叢日本語の研究』，明治書院

林八龍（2004）「日・韓両語の表現構造の対照研究―日本語の名詞的表現に対する韓国語の動詞的表現を中心に―」，『日語日文学研究』50-1，韓国日語日文学会, pp.211-233

林八龍（2014）「일・한 양국어의 표현구조의 대조연구」，『분야별 현대 일본어학 연구』，박이정

関連 web サイト

「日韓対照大学生作文コーパス」開発プロジェクト
（本プロジェクトの web サイト）https://sites.google.com/site/pjkcomcorp

作文を支援する語彙文法的事項に関する研究プロジェクト
（「児童・生徒作文コーパス」）https://sites.google.com/site/sakubunshienpropject/home

みやぎ　しん／富山大学　准教授
いじゅういん　いくこ／東京外国語大学　准教授
ノ　ジュヒョン／徳成女子大学校　助教授
ムン　ジーヨン／日本女子大学　非常勤講師
（2016年11月2日 受理）